

伊勢物語拾遺抄  
天





伊勢物語拾遺抄一



いせ物語ありは伊勢乃はこれ昔傳せりゆへり歌号をも  
 かくつりつてご程を根源流しきく味し難きより  
 定家卿乃は奥出りてゆへに故はは抄しりて下し  
 此奥乃河とて舟をよむごりたれどもとあり舟乃  
 事ハきくごりたれどもとてさるるあやさよあど  
 ころ事ありき今も早下り河たれどもとて乃去傳  
 乃とて也又心中乃秘密とて二条屋よりまつりてい  
 秋宮より逢せりし事ありをさるることとてあり  
 ころ乃事他人乃推さるる事なりかきさるる事あり  
 業平釣魚乃日記あり也是と定家卿の日記也上上朱菴  
 院乃塗はつり業平乃自筆の伊勢物語とてとて記

Handwritten marks in the top right corner.

Handwritten marks at the bottom of the page.

とあるを也 石州法師神祇考の記 志つれどもいれぬるの申

了仁乃帝の行河乃行幸其事行りてさあむいらか

と多ひくは其事見乃行平の事とあり且又は

治葉平乃舟の行りてさあむ葉集乃舟とて出たり

とある所をいふ事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

と見ゆる事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

かすは進ば古人乃行後よりとてさあむ葉平乃日記の双

成る事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

とありてさあむ葉集乃舟とて出たり

とありてさあむ葉集乃舟とて出たり

葉平の平城天皇乃行後よりとてさあむ葉集乃舟とて出たり

とありてさあむ葉集乃舟とて出たり

とありてさあむ葉集乃舟とて出たり

同三年の河保親王表をなす事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

より三代實録より見ゆ陽成院乃元号元年より志近

推中將より見ゆ在厚より見ゆ事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

惟法抄より見ゆ事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

南より見ゆ事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

より鴨舌明が言明抄より見ゆ元号四年五月廿八日より

六葉より見ゆ事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

石上乃在厚寺也玉葉集より見ゆ事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

かこむる事ありてさあむ葉集乃舟とて出たり

りてさあむ葉集乃舟とて出たり

りてさあむ葉集乃舟とて出たり

りてさあむ葉集乃舟とて出たり

りてさあむ葉集乃舟とて出たり

りてさあむ葉集乃舟とて出たり

伊勢ハ伊勢也。終焉乃此とあり。野乃元祖志友乃孫子也。  
七条在温より一宮に之乃女房と云々。帝乃電をさるる。行明、  
親ををうめり。よりく伊勢乃信長也。及撰集大和物語  
等よりハウケリ。皇子を生まる人をみやと云ふ。之にハ伊勢の信  
ともいへり。家ハ二条東洞院よりあり。之信周法師兼音  
と車乃志り。のせく。信に二条東洞院より信周法師  
下等より。教町歩行と。兼房あやと云々。同々れを  
信周云。伊勢乃信長家乃信あり。の信乃うらな。松今  
にある。づら。のの。あ。らんやと云々。松乃今ゆ。わ  
里。東車せす。信輔。信乃信。若子。あり。墓ハ信長  
信長周が四條乃古曾部と云ふ。乃う。伊勢寺と云々。信  
長。近き代。永井日向也。殿。再興。三。ひ。林。善。信。中。り。云

碑をのせしむるあり

伊勢物語より。む。ハ。知。信。の。古。注。の。信。の。あ。や。三  
き。説。を。は。あ。び。女。誰。の。人。ハ。人。あ。と。云。信。周。  
が。事。の。み。あ。る。を。一。条。の。信。周。清。水。兼。房。の。信。長。註  
を。見。や。あ。り。て。更。り。新。注。を。あ。り。愚。見。抄。を。あ。り  
あり。又。道。遠。院。殿。二。条。家。乃。信。長。の。信。長。を  
終。く。宗。祇。と。信。長。合。あり。彼。愚。見。抄。の。お。邊。を。あ。り  
一。の。一。流。を。一。の。多。く。を。高。家。乃。信。と。云。り。道。遠。院  
殿。乃。信。長。を。一。の。母。信。三。信。還。翠。軒。惟。信。抄。を。述。ゆ。の。ま。り  
道。遠。院。殿。家。祇。乃。符。第。を。公。せ。の。か。こ。也。奥。出。せ。ま。り  
せ。ま。り。又。宗。祇。乃。清。流。を。き。こ。杜。丹。花。を。人。久。我。殿。青。園。抄  
を。述。ゆ。の。ま。り。宗。祇。奥。出。の。ま。り。細。河。云。信。長。の。ハ

三光院殿道遠院乃法儀をレ付多ひくレ此か祖遠遂翠彩

乃惟法抄をとレしレ青岡堂此法抄乃義をとり用ひくレ國親

抄をあらわしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

當本寺の真後高院勅止り真後高院公蘇州寓休理夫人道德胤稱各院殿在方里  
少前内海御次手中給其後亂時紛失越前朝倉入道京順水出テ右扶武田仲夏道紹皇  
是傳被及後故無武甲本ト号其後三好休理夫長慶是傳リ彼人後後教手ヲ經テ  
天平六年仲秋和原塙リ水出テ細川玄音入道所持定京自筆本今世ニコリテ此本ニ也

自第一ノ公合乃幸而目指也可備法奉で此真書乃幸のレ

と道遠院殿又公合せられて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり

まらしまりしまりは抄南儀乃義をのべて是レ法をあらわしまり









略長明堂明抄云。和身乃印。伊勢物語は撰乃多れ河を  
まねふこ

まねふこ  
乃河去乃多る舟りりけてさ味あゝる。ゆよの河

順徳院沖記云伊勢物語の河のりりり事なれどもむよめ  
まこ奇跡あり

綱鑑抄云諒奇大概も古今伊勢物語は撰松述をまよふ  
まよふ也。古今乃次り伊勢物語をのせく。はては撰ある  
ういむ賞殿とて事ごとれは二系家二代集傳授し。いせ  
あざりを始めよむ。ありとあり

いせの河を始めよむ。ありとあり  
いせの河を始めよむ。ありとあり

むりやまこ  
とよみきりて男と  
よむ。今乃世れこ  
あれど。伊勢物語の  
あまのこ。ありとあり

あまのこ。ありとあり  
あまのこ。ありとあり

あまのこ。ありとあり  
あまのこ。ありとあり

あまのこ。ありとあり  
あまのこ。ありとあり

あまのこ。ありとあり  
あまのこ。ありとあり

あまのこ。ありとあり  
あまのこ。ありとあり

あまのこ。ありとあり  
あまのこ。ありとあり

平城の宮  
大和守上

領地あるが、平休天皇ありのきりかりも女

くつりてふたり 青 け足東の女 古 誰にもあきさてもを 誰 誰にもあきさてもを 誰 誰にもあきさてもを

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

あきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても 一 誰にもあきさても

初神抄武蔵  
養老トコソニ  
ハシタリトシ  
平休天皇アリ  
カ  
ニサレハケフ  
ニ  
モモ古全

名也武義野あり  
去日神もあま

とあんないはうい  
ちりく

一さひまのいり  
いひやうやう  
あまよふてや

遠早しと云はれし  
天福本定家抄勅物  
河原方大臣寄也  
八月廿五日薨  
於在中將飛義忠

如何

愚業そよりあはの内は有等の實ハ世  
はわでなりあき事なりやあひいん  
以下乃註乃心愚見かと惟清  
乃作者は乃行をうたり  
乃并より用ひてあま  
乃大信 寛平七年  
先を乃注されを  
中よりいひ  
四つハ

れずと業平のよみ  
彼中將飛義忠  
か復乃注を  
とをま  
ちりく  
ひ  
やう  
建也天福本  
師もは  
れずと  
又青岡  
目ひ  
とらん  
やう  
業平  
あひいん  
る白



一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一

神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一

神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一

神代卷一

神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一

神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一

神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一

神代卷一

神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一 神代卷一



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is densely packed and covers most of the page.

しん

しん

しん

しん

しん

Vertical line of text separating the two pages.

Handwritten text at the top of the left page.

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

しん

1. 昔は...  
 2. ...  
 3. ...  
 4. ...  
 5. ...  
 6. ...  
 7. ...  
 8. ...  
 9. ...  
 10. ...  
 11. ...  
 12. ...  
 13. ...  
 14. ...  
 15. ...  
 16. ...  
 17. ...  
 18. ...  
 19. ...  
 20. ...

1. ...  
 2. ...  
 3. ...  
 4. ...  
 5. ...  
 6. ...  
 7. ...  
 8. ...  
 9. ...  
 10. ...

1. ...  
 2. ...  
 3. ...  
 4. ...  
 5. ...  
 6. ...  
 7. ...  
 8. ...  
 9. ...  
 10. ...  
 11. ...  
 12. ...  
 13. ...  
 14. ...  
 15. ...  
 16. ...  
 17. ...  
 18. ...  
 19. ...  
 20. ...



陣より中将弓勢を帯  
大内は信依とてついで  
いしうりやうとあれは  
う交つてしうの事  
也信内。月弓やまぬを  
かのくここのめいけき  
神をとう。一程の流  
け時當年ハ近衛の  
を肩つてしうの事  
しやあしあけりん  
ま人を盗えしりん  
よあふまてしうの事  
あけしうとあしりん

くれと神さうらむな  
まやうく。あしあけり  
く。女とあし。あしあ  
ぶ。わいあし  
ま。あふまてしうの  
つあしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん

あしあけりん  
一蹶とあしあけりん  
まあの上れあしあけり  
は梅。あしあけりん  
をこし。あしあけりん  
に豊のしうあしあけり  
あしあけりん

これハ二条乃居の  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん

これハ二条乃居の  
去作者乃居  
動物云高下元  
年正月お中宮  
まあしあけりん  
まあしあけりん

あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん

大内  
二可  
よあしあけりん  
大内  
まあしあけりん  
まあしあけりん  
まあしあけりん  
まあしあけりん

あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん  
あしあけりん

伊拾遺

三







つれづれに〜  
ていつ〜  
ていつ〜  
ていつ〜

つれづれに〜  
ていつ〜  
ていつ〜  
ていつ〜

つれづれに〜  
ていつ〜  
ていつ〜  
ていつ〜

つれづれに〜  
ていつ〜  
ていつ〜  
ていつ〜

横濱

旅のついでに人々を  
取寄られたる人々を  
知れぬと云ふ事  
さういふ事

今頃のついでに

戸口で物置を基に

物置を東人陣家

さういふ事

後頼田田面

おどろき居る

いひつゝの東の

より一向の

居る

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

いさゝか  
さういふ事

武蔵野

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

いさゝか

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

しつゝのりか

しつゝのりか

はくわく

廿四

廿三

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

しつゝのりか

はくわく

Handwritten text at the top right of the page.

Handwritten text in the upper right quadrant.

Handwritten text in the upper middle quadrant.

Handwritten text in the upper left quadrant.

Handwritten text in the middle right quadrant.

Handwritten text in the middle middle quadrant.

Handwritten text in the middle left quadrant.

Handwritten text in the lower right quadrant.

Handwritten text in the lower middle quadrant.

Handwritten text in the lower left quadrant.

Handwritten text in the bottom right quadrant.

Handwritten text in the bottom middle quadrant.

Handwritten text in the bottom left quadrant.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Handwritten text on the right side of the page.

Small handwritten mark on the right edge.

Small handwritten mark at the bottom right.

Small handwritten mark on the left edge.

Small handwritten mark in the middle left.

Small handwritten mark in the middle left.

Small handwritten mark at the bottom left.

Vertical text on the left edge of the page.

Vertical text on the left side of the page.





くして... 又二説... 其の... 眞... 助... 紀有常... 正四位下

一紀有常ハ正四位下  
名虎ガ男也

去三代の法門淳和仁明  
文徳乃の時。あひれ  
ご文法第一乃皇子惟

高親王とまけり  
ハ名虎とむすめはゆ  
市伝よつせもす  
有常ハさうんを第二  
乃皇子法和乃法伝

つるをいひくが名虎方  
乃そのいさむらへ  
愚案 三代實録曰清和

天皇諱惟仁文徳天  
皇第四子也母天皇太  
右藤原氏太政大臣  
良房忠女也嘉  
祥三年三月廿五日生

同十月立皇太子  
是者諱云大枝平  
超天走超天騰躍上

那加理超天我那護毛留田  
以爲大枝詔大兄也超三兄而立  
有讓實位下惟高親王之志太政大臣忠仁公惣攝天下政爲第一臣

之河漸經數月或祈請神祇又修秘法祈佛力真湊僧正者爲小野親王祈  
師真雅僧都者爲東官護持僧三これを世り位ありきり

あてりきり... 貴當... 論語... 子貢曰貧而無諂富無驕何如子曰可也

ひり... 紀有常のありきり

ひり... 長恨多傳の傳

ひり... 一説... 女世務

ひり... 有常

ひり... 識者

ひり... 江談二日天安皇帝

ひり... 小野親王

ひり... 論語... 子貢曰貧而無諂富無驕何如子曰可也





亦云いふまれば、一ツの  
極し、昔年のハコをよ  
志らふなり

あまの女、唯あまの  
心、水町より一徳のれは  
あま下、漢書に、漢人、  
と、同じと、り、漢人、  
いふ、さ、昔、さ、り、  
いふ、人、さ、り、さ、り、  
言、甲、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、昔、年、の、心、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

初書、コ、ク、ナ、キ、  
ノ、名、ナ、リ、  
ハ、紀、有、リ、  
モ、リ、  
ア、天、國、ハ、  
モ、リ、

ア、天、國、ハ、  
モ、リ、

い、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

















せんはわらやうみもて  
がし。只中ねを恨て  
つるや。おの月をハ  
能くや。よかくこは  
物たりよみ。 甲 後月  
あつさうやあしつきは  
。宵うとこつはく  
車。右後三三年と云  
。お月。重徳の神事考  
。月。引とこ。お月  
物を棒り。まう。 乙  
り。おこ。つ。し  
と。つ。つ。年と  
。つ。つ。あ。よ。と。の  
心。つ。つ。お。心。の。あ。よ。  
心。ひ。き。し。年。を。ね。る。  
と。と。と。の。ち。く。し。と  
君。う。い。い。く。せ。と。と  
お。月。こ。二。つ。い。ひ。物

とつひひ 一 存 梓 たりなれど  
あづさ 二 存 梓 たりなれど  
わさ 三 存 梓 たりなれど  
とつひ 四 存 梓 たりなれど  
あづさ 五 存 梓 たりなれど  
わさ 六 存 梓 たりなれど  
とつひ 七 存 梓 たりなれど  
あづさ 八 存 梓 たりなれど  
わさ 九 存 梓 たりなれど  
とつひ 十 存 梓 たりなれど  
あづさ 十一 存 梓 たりなれど  
わさ 十二 存 梓 たりなれど  
とつひ 十三 存 梓 たりなれど  
あづさ 十四 存 梓 たりなれど  
わさ 十五 存 梓 たりなれど

され。君。三。家の。し。と。と  
い。ん。と。し。つ。ら。と。と。と。  
か。つ。い。ち。つ。つ。つ。つ。  
こ。し。つ。り。ま。我。う。ま。い。  
を。ま。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
と。し。呼。我。せ。つ。つ。つ。つ。  
せ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
と。の。中。を。し。つ。つ。つ。つ。  
あ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
よ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
ね。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
あ。い。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
と。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
乃。切。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
あ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
女。一。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
集。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
と。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
が。あ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。つ。  
お。の。野。よ。り。 甲 秋の野

わさ 一 存 梓 たりなれど  
あづさ 二 存 梓 たりなれど  
わさ 三 存 梓 たりなれど  
とつひ 四 存 梓 たりなれど  
あづさ 五 存 梓 たりなれど  
わさ 六 存 梓 たりなれど  
とつひ 七 存 梓 たりなれど  
あづさ 八 存 梓 たりなれど  
わさ 九 存 梓 たりなれど  
とつひ 十 存 梓 たりなれど  
あづさ 十一 存 梓 たりなれど  
わさ 十二 存 梓 たりなれど  
とつひ 十三 存 梓 たりなれど  
あづさ 十四 存 梓 たりなれど  
わさ 十五 存 梓 たりなれど

朝の神

母は神も病もさるる  
おちれどもなれをば  
袖よりおいで一人ね  
衣はれ袖のぬれを  
さしぬいちはぬれ  
ふしめらるる  
海ねお布もさるる

ありてぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女

我があはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女

あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女

あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女

あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女  
あはれぬいちはぬれ  
さるる女

下も又ありとて  
師を又みの下にあるも  
我氣かれハ畢竟我程  
物より入ハ又よりとの也

今も又ありとて  
師を又みの下にあるも  
我氣かれハ畢竟我程  
物より入ハ又よりとの也  
今も又ありとて  
師を又みの下にあるも  
我氣かれハ畢竟我程  
物より入ハ又よりとの也

今も又ありとて  
師を又みの下にあるも  
我氣かれハ畢竟我程  
物より入ハ又よりとの也

今も又ありとて  
師を又みの下にあるも  
我氣かれハ畢竟我程  
物より入ハ又よりとの也

貞観二年二月貞明親王為太子于時太子有女  
依春宮母後号也壬午年十二月廿六日誕生于壬午年廿七

今も又ありとて  
師を又みの下にあるも  
我氣かれハ畢竟我程  
物より入ハ又よりとの也  
今も又ありとて  
師を又みの下にあるも  
我氣かれハ畢竟我程  
物より入ハ又よりとの也

抄

下も又ありとて  
肝も又ありとて  
我れわれハ畢竟我れ  
おと入ハ又ありとて

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

今もくちハ我れハ人ハさう  
ありとてハ人ハさう

手紙









入道公... 学... せ

い... せ... せ

紫子内親王を葬... せ

を合... せ

如... せ

合... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

あ... せ

い... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

甲... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

あ... せ... せ

ていふにやういふ

さしむる女の取次  
ついでにめねすまねが  
じよあまのりりす  
おとこに男に女のお  
けしはくごさうすま  
まうやんとあて  
こころはれ、男のり  
のふれなまのほじ  
ゆかりすれし  
こころやねい  
こころいよひ

兼平は附きこやま  
世の多めれ女を制  
ともし威勢ま  
とやんたれ、ま  
女のみまことお庭  
真如爵に當真期  
二齒のや  
とひうつ文選馬融長  
笛賊放臣逐子春妾  
逐謂逐出之者

さしむる女の取次  
ついでにめねすまねが  
じよあまのりりす  
おとこに男に女のお  
けしはくごさうすま  
まうやんとあて  
こころはれ、男のり  
のふれなまのほじ  
ゆかりすれし  
こころやねい  
こころいよひ

ありかたれい  
雅みま  
おとこに男に女のお  
けしはくごさうすま  
まうやんとあて  
こころはれ、男のり  
のふれなまのほじ  
ゆかりすれし  
こころやねい  
こころいよひ

とひうつ文選馬融長  
笛賊放臣逐子春妾  
逐謂逐出之者  
ありかたれい  
雅みま  
おとこに男に女のお  
けしはくごさうすま  
まうやんとあて  
こころはれ、男のり  
のふれなまのほじ  
ゆかりすれし  
こころやねい  
こころいよひ

ありかたれい  
雅みま  
おとこに男に女のお  
けしはくごさうすま  
まうやんとあて  
こころはれ、男のり  
のふれなまのほじ  
ゆかりすれし  
こころやねい  
こころいよひ









何れも空のけしき  
をりま

唯古同敷

唯古同敷

けしきも唯  
都をみたり

けしきも唯  
都をみたり

空のけしきも  
唯古同敷

空のけしきも  
唯古同敷

やうもさ  
まじり

やうもさ  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

まじり  
まじり

何れも空のけしき

まじり

唯古同敷

まじり

けしきも唯

まじり

都をみたり

まじり

空のけしきも

まじり

唯古同敷

まじり

やうもさ

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり

まじり





此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...

此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...

此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...

此の御入道... 天福寺... 御入道...  
 此の御入道... 天福寺... 御入道...

け年は撰集第九の巻の終りにては定めていざなふ  
 愛はなまゝにしるしをいさふ。一は定めていざなふ  
 中にもあまのつゝにきかぬよりの思ふおもひは

集めていひ義の目し一は定めていざなふの思ふおもひは  
 の末は終つていざなふの思ふおもひは

なり法をひ一終は終つていざなふの思ふおもひは  
 の先は終つていざなふの思ふおもひは

ねは終つていざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

推していざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

あはれにいざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

あはれにいざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

あはれにいざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

あはれにいざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

あはれにいざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

あはれにいざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

あはれにいざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

あはれにいざなふの思ふおもひは  
 の思ふおもひは

長巻植

長巻植



多岐しあるところを... 又天台云漏法華之結拾遺槃之穂一

高をうぐさひらん 五十九  
惟おのまやまふうり  
らんとあがりし

まわびぬ所今なるまわび  
こみ那の信ををらんし果  
しとてま依りあはは

撰よ六世の法をまひし  
ゆるるは昔年抄巻し  
まうも能本ころまき者

まわびぬ所今なるまわび  
こみ那の信ををらんし果  
しとてま依りあはは

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

おのまやまふうり  
らんとあがりし

まわびぬ所今なるまわび  
こみ那の信ををらんし果  
しとてま依りあはは

撰よ六世の法をまひし  
ゆるるは昔年抄巻し  
まうも能本ころまき者

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後  
あまのよめわたり後

ふ富く恒上古小の字  
作ハミクく使ミリの  
時トの家ヲ重ルオ  
ミハ使ミミルハ非  
ル

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一

カガキテハ空一  
カガキテハ空一  
カガキテハ空一





左の中将一葉年を  
在原良の河原敷の  
弟み乃子まれのうい

つゝあんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり

あんなり  
あんなり  
あんなり



去ののち... 御前... 女... 幕... 直... 幕... 上...

ちほ... あり... して... と佛... 今... お... 下...

去ののち... 御前... 女... 幕... 直... 幕... 上...

ちほ... あり... して... と佛... 今... お... 下...

神性 神の御心は  
 ありてはしりては  
 けりしをけりては  
 也と教へては  
 しては神の御心  
 ありてはしりては  
 けりしをけりては  
 也と教へては

神の御心は  
 ありてはしりては  
 けりしをけりては  
 也と教へては  
 しては神の御心  
 ありてはしりては  
 けりしをけりては  
 也と教へては

神の御心は  
 ありてはしりては  
 けりしをけりては  
 也と教へては  
 しては神の御心  
 ありてはしりては  
 けりしをけりては  
 也と教へては

神の御心は  
 ありてはしりては  
 けりしをけりては  
 也と教へては  
 しては神の御心  
 ありてはしりては  
 けりしをけりては  
 也と教へては

又よりのなにもはげしの  
なをいかにやすん中と

もよりのなをいかに  
まのありま初めに素

平時いあるうして保  
もあつたあやあや

ふいふ平足才み入あ  
甲し仲平初年古

平大に音人書年し  
あふはしをけし

買ひあひ書平初見  
おののあやあや

てはあつたあやあや  
はげしのあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

はげしのあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや

あつたあやあやあや  
あつたあやあやあや



ういふことせりわ

まいらせまの字又

居乃字まの字は

甲の母方の所方に

業を居させ

と一指直はき

りしつと云はれ

われはものんといふ

あつとくはれ

やとまをせしと

のわれもきよありん

とまをせしと

おちりやまの

よわれせしと

ういふ

まをせしと

甲の母

同心あべ

いふこと

まをせしと

ういふ

ゆふかりなり

かてぬん

ふね

いふ

人め

と人

を

り

れ

一

こ

ら

い

ふ

ま

あ

は

い

ふ

ま

あ

まをせしと

甲の母

同心あべ

いふこと

まをせしと

ういふ

まをせしと

甲の母

同心あべ

いふこと

まをせしと

ういふ

まをせしと

甲の母

同心あべ

いふこと

まをせしと

ういふ

まをせしと

甲の母

同心あべ

まをせしと

甲の母

同心あべ

いふこと

まをせしと

ういふ

まをせしと

甲の母

同心あべ

いふこと

まをせしと

ういふ

まをせしと

甲の母

同心あべ

いふこと

まをせしと

ういふ

まをせしと

甲の母

同心あべ





らうして無えと登

つり乃はひちあかり

まの照し日射ら

尾張つりて伊勢又

かしの可のま

かたごい一伊勢のま

つり乃のわりの一奴

まよる侍小立置を

んめりううしや

甲梅松和布と入

けわつ後女ま草

てんりしうわ

内乃内つら

時のううま

わさう一車

まよる侍

甲女まの

あすまの草

はしうま

らうして

じりあかり乃はひちあかり

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

あかまのま

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

拾遺人丸

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

11

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた

あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた  
あつちの海へ行くはなはた



愚案 元三 書三 釋惠

運洛陽人也東寺僧惠  
徒也承和五年共田仁  
師同報入唐歸去安  
祥寺第一世

一持物たる堂の存る後  
一山の名中いかに

右系常行一太右長相

一男女産の片見也貞觀八  
年十月十八日右太将也

かうりやうりやうり

去八海し押は海經を  
これ要文をあげて

同者海師回答乃  
ありあり

めえいづいづい一月ハ  
遠いあゝい推物をお  
又あゝいづいづい

あゝいづいづい一月ハ  
をばさるゝいづいづい

けらるゝいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

りやうりやうりやうり

やうりやうりやうり

れを右太将りやうり

乃はおのゝいづいづい

いづいづいづいづい

あつりやうりやうり

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

持物のあり

一子

海

一葉平貞観七年三月二十七日推物

右太将りやうりやうり

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

あつれがわり

女從置下藤多賀子右大臣長女

貞観二年天安二年十一月廿四日

安祥寺五条右頭子建立寺也

常行貞観二年十一月十六日

二月十六日右太将也西三条右大臣長相一男

葉平貞観七年二月廿七日

天安平女御、流るゝ如何、若は違ふれ

常行の太将葉平の太将の皆貞観年中

とて天安平のちのちの進みやうやう

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい

いづいづいづいづい



てきまゝの紫衣大居士の  
百花亭へり母の母れ  
おの百花亭として亭  
をばりて居たり花  
とてやうする

愚業三代實徳玄貞觀  
八年三月廿三日鸞鳥興

幸有大臣良相西京亭  
觀櫻花喚友人賦百  
花亭詩預席眾人  
わをまことんをまことん

を平くまことん  
あつねもいづる

て又せまことん  
まことんあつねもいづる

りすまことん  
りをまことん

民の中へ  
中に親より生れぬ  
事平乃女は膝小

あつねもいづる  
まことんあつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
心をせんよりあつねもいづる

こあんよちりりり

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

貞徳親王とされり  
をヤシ愚業三代實  
孫玄貞親王とされ  
陵王上下觀者感而  
密涙痛畢外祖父  
中納言行平侯實基  
下抱持親王歡躍而  
出親王于時八雲  
わが心に云わが心に我  
一門のいちひろなき  
也八尺をるくそう  
致その貞親の今に生れ  
まひを我同りまひ

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる

あつねもいづる  
あつねもいづる  
あつねもいづる







